

浄

monthly  
JODO

土

2003 November

11





昭和35年4月号



昭和35年5月号



昭和35年6月号



昭和35年7月号



昭和35年8月号



昭和35年9月号



昭和35年10月号



昭和35年11・12月号



昭和36年1月号



昭和36年2月号



昭和36年3月号



昭和36年4月号



昭和35年5・6月号



昭和36年7月号



昭和36年8月号



昭和36年9月号

# 浄土

2003/11月号 目次

|                     |          |    |
|---------------------|----------|----|
| 沖縄の袋中上人 .....       | 御代英資     | 2  |
| 会いたい人 北村和夫① .....   | 関 容子     | 10 |
| 梵字⑤ .....           | 真野龍海     | 20 |
| バリアフリー考④ .....      | 白木 力     | 22 |
| 代替医療という世界⑦ .....    | 井上朝雄     | 24 |
| 響流十方 .....          | 林田康順     | 26 |
| 法然上人の和歌と私 .....     | 佐々木美冬    | 30 |
| 表紙のことば .....        | 永井健策     | 35 |
| 連載 法然上人をめぐる人々 ..... | 石丸晶子     | 36 |
| Jフォーラム .....        |          | 43 |
| 浄土誌上句会 .....        | 選者=増田河郎子 | 44 |
| マンガ『さっちゃんはネッ』 ..... | かまちよしろう  | 47 |
| 編集後記 .....          |          | 48 |



表紙題字=浄土門主 中村康隆 猊下  
アートディレクション=近藤十四郎  
協力=迦陵頻伽舎

沖繩の  
袋中上人

御代英資

袋中研究家・日本アイアール(株)相談役

慶長八年（一六〇三）、袋中上人五二歳にして琉球に渡る。爾來四〇〇年、上人ご遺業顯彰の奉賛にかえ、ここに拙文を記す。

### 宿願の入明理由

『光明院開基以上人行狀記』（淨全一七卷所収）には、袋中が江戸・増上寺での修学を終えたあと、畏兄であり道交の師でもあった以八を訪ね、明國渡航の意志を明したときの様子が書かれている。その一文を次に紹介してみる。

なお、以八は袋中とは一二歳年長の同母兄であり、捨世派の修行僧として回国し、嚴島に光明院を創建していた。

或時師（以八）の許にきたりて異朝へわたらんとおもふ由をかたる。師これを詰していわく。汝從來日本へつたはる所の經論章疏等あまねく披閱して是を明らかに得たるやいなや。若これを曉<sup>あき</sup>らめ得ても心頭いまだ安からずんば則ち渡海せよ。我あへてとどめずとありければ、定公（袋中良定）一言の答なし。

この一文を根拠に、よく袋中渡明の目的は末渡の經論を將來することにあった、といわれている。しかし、それだけが渡明の目的であったであろうか。

たとえば、袋中は善導大師の祖室であつた石壁玄中寺（山西省・大原）に留錫<sup>るしやく</sup>したあと、玄奘と同じように長安から西域を抜けてインドに入り、聖地巡礼を志していたと考えることもできよう。

その理由は義山の詞書<sup>しごがし</sup>による『袋中上人絵詞伝』、あるいは自著である『当曼白記』<sup>たいまんびやくぎ</sup>全一二卷などに書かれているように、袋中も偏依<sup>へんね</sup>善導であつた。

また、琉球王府高官の依頼によつて書かれた『琉球神道記』卷第三は古代中国概史であ

り、玄奘三藏について再三ふれている。

なおまた、袋中三〇歳、岩城（福島県浜通り）で名越派田舎檀林の住持であったとき、『梵漢対映集』二巻を著している。

日本の梵字梵語学は江戸時代後期に、真言宗の学僧慈雲（じうん）によつて隆盛をきわめた一時期があった。それより一五〇年も前に、袋中は独学によつて梵字学の先駆けとなつていたのである。袋中の意中を察すると、梵字の修得は聖地巡礼の意図からであつたように考えられるのである。

### 「人生五〇年時代」の旅立ち

護持佛である御丈一尺ばかりの弥陀三尊像と、『神道集』（安居院編）の自筆抄録本を納めた笈（おけ）を背負い、錫杖を手にした袋中は、厳島で二十数年振りに以八と再会した。

瀬戸内を回国していた以八は、文禄六年（一五九二）に始まつた秀吉の朝鮮出兵をめぐり、日明関係が最悪の状態にあることを熟知していた。それだけに袋中を明国に送り出す以八の胸中は、いかばかりであつたろうか。

袋中は九州の平戸から、琉球国籍の大型帆船に乗つたようである。というのは、当時の琉球は明国に服属していて、明国から大型帆船を貰い受け、それを使って明国との朝貢貿易や、日本・南蛮との中継貿易を行つていたからである。

袋中の乗つた琉球船は東シナ海を横断し、明国から指定されていた福州港へ福建省（閩江口）に入港したはずである。しかし、福州港での明国の役人は、日本人であるという理由だけで、袋中の上陸を固く拒絶した。かくして、琉球船は宿願を果せなかつた袋中を再び乗せて、那覇に入港したのである。

# 尚寧王と儀間真常の帰依

時の琉球国王尚寧<sup>しょうねい</sup>は袋中に帰依して桂林寺を創建し、袋中を開山と仰いだ。この寺跡は那覇市松山町松山公園の奥（那覇商業高校に隣接）にある。そこには大正一三年に沖縄佛教連合会と史跡保存会の発起で建立された、高さ三メートルほどの袋中上人行化碑<sup>ぎょうけ</sup>が立つ。この場所は今次大戦の激戦地でありながら、行化碑は無傷であるかのように見える。砲



袋中上人肖像 琉球国尚寧自画賛（宗宝） だん王法林寺蔵

弾の雨で山の型さえ変つてしまつた當時を想像すると、まさに奇跡としかいえないようがない。

この石碑は桂林寺建立の由来から始まり、「儀問親方（地頭職）真常八（袋中の高弟タリシト云フ）」とあり、真常が琉球の殖産事業に貢献したことが記されてある。次に「上人留錫四ヶ年（満三年）、（琉球を）去ルニ臨ミ、真常二自筆六字ノ尊号及ビ念珠、鉦ノ三法器ヲ授ク。云々」とつづく。

ここに記されてある三法器とは、藤堂祐範先生が大正九年に沖縄に渡り、袋中の資料収集に当られたとき、那覇市垣ノ花に住していた真常の末孫の家（又吉家）から発見されたものである。念珠の中には珠が半ば失われたものもあり、それは疫病退散の呪（まじない）として、袋中が島民に一つずつ分け与えたのであつたという。

これら袋中の遺徳のほどがしのばれる遺品は、すべて今次大戦で焼失し、今では藤堂先生に残された写真でしか見るできない。なお、垣ノ花とは真常が地頭職をつとめていた那覇港南岸一帯の地域である。

儀問家六世の真常は、勢頭役とよばれた首里王城の守備隊長でもあり、尚寧王の侍従でもあつた。おそらく袋中が尚寧に進講なされる浄土往生の教えを、そば近くで聞いているうちに、真常は尚寧ともども袋中に帰依したのであろう。

かくして儀問真常は一家眷属はもとより、垣ノ花の農民を集めて念佛講を開き、袋中に浄土宗の教えをやさしく語らせたであろう。これが後世まで垣ノ花浄土、または小禄浄土とよばれた浄土宗徒の集団誕生であつた。

### 古琉球時代の宗教事情

この頃の記述は、袋中が滞琉中に執筆した『琉球神道記』巻第五の一部紹介でもある。

当時の首里城の北には、鎌倉円覚寺を模した臨済宗の大刹が建ち、沖縄本島だけで二十数寺をかぞえた寺院のほとんどが臨済宗であった。そして、琉球王府の庇護を受けていた寺僧は、薩摩の島津氏との外交折衝や貿易実務に当たっていて、琉球の島氏にとっては全く縁なき存在であった。

というのは琉球の島氏は、古来から先祖神を固く崇拜し、併せてオナリ神を信仰していた。このオナリとは男の兄弟からの姉妹の呼称で、オナリには男性を守護する靈力（セイジ）があると信じられていた。

それ故、琉球の男たちにとって、村の女性はずべて神女であり、神女の中の神女は祝女とよばれた。クバ（ヒロウ・アジマサ）の森に開けた聖域（御嶽）で行われる神祭りは男子禁制である。村の神女を従えた祝女は、目には見えない来訪神（キンマモン）を迎え、耳には聞えない神の声（託宣・ミセセル）を聞く。この神の声に従って、男たちは村の政治を行っていたのである。

この来訪神は先祖神・五穀豊穡の神・火の神などであり、海の彼方の楽土であるニライカナイから来訪すると信じられている。また、ニライカナイは死者の魂の赴く他界でもあり、古代日本人が想定した常世の国と同じ観念ともいえる。

この先祖神崇拜は遠い先祖はもとより、今現在、墓の中に葬られている死者も同列である。沖縄では亀の甲羅に似た大型の亀甲墓を見受けるが、この墓は門中とよばれる父系親族の共同所有である。貧しい島氏は洞穴や岩穴を利用した、風葬のできる横穴式の村墓に死者を葬った。

島民にとって先祖霊は、子孫の幸福と繁栄、攘夷などの守護神である。それ故に、祖霊

に対する報恩感謝の墓前祭は、まことに盛大な年中行事の一つである。

郷里岩城での袋中の前半生は、在野の学僧であり、かつ治病と鎮魂を目的とした遊行僧でもあった。袋中の学んだ名越派の伝法には「亡者回向の伝」があるだけに、琉球にあつても墓前を通るとき、必ず袋中は足を止め、深々と頭を垂れて合掌し、亡者回向を修したのである。

### 盆踊り「エイサー」の誕生

このように墓前で念佛を称える袋中の姿を、農作業をする島民は見逃すはずはない。いつしか、クバ笠をかぶり頭陀袋を首にかけ、『琉球神道記』の取材行脚をつづける黒衣の袋中の後には、男の子や幼子おさなこを背にした女の子たちの一団が従っていた。

毎年、琉球を襲う台風の影響は大きく、当時の島民は、いつも飢えに苦しんでいた。飢えと病で死んでゆくのは、まず母親からであり、残された子どもは継母継母と暮らす。

墓前で袋中と念佛を称え終った子どもの中から、袋中に次のように語る子があつた。

「和尚さん。わたしの母は、この墓の中にいるのです。」

五つの年に 母ははもどち（死ぬこと）

七つになたと うびんじゃち（思い出すこと）

と歌うように泣きじゃくり、生みの母との再会の方法を問うのであつた。

「七夕がきたら、お墓の中を竹筒でのぞいてもらん。きつと母ははと会えるから。そして、きつと母はこういわれますよ。」

七月七夕 中の十日

後世（死後の世界）の七門が開くとき

お茶の入れ立てを 供えておくれ

作物のお初を 供えておくれ

トンボを見たら 母ママと思いなさい

チョウチョを見たら 母ママと思いなさい

夏の雨も 雨と思いなさんな

冬の霜も 霜と思いなさんな

それは母の涙と思いなさい——」

（エイサーの代表歌『ママのニソフチ継親念佛』の一部口語訳）

と子どもに語る袋中は、ママ継子として育った自分の幼かった日々を、切なく思い出していたことであろう。

このように語る袋中の言葉を、いつしか子どもたちは「エサオモロ」とよばれる労働歌のメロディにのせ、墓前で踊り始めたのである。これがエイサーと現在よばれている琉球の念佛踊りの起源であろうと、私は想像する。

一七一三年に琉球王府によって編集された『琉球国由来記』という歴史書には、「本国ノ念佛八万曆ばんれき（明国の年号）年間、尚寧王ノ世代、袋中トイフ僧渡来シテ、佛教ノ文句ヲ俗ニヤワラゲテ、初テ那覇ノ人民ニ伝フ。コレ念佛ノ始ナリ」と書かれている。

ここに書かれている「念佛」とは、袋中直系の垣ノ花浄土をさしていることは明らかである。また、それとは別に四〇〇年前、子どもや島民から、ただ「念佛」とよばれていた二十数詞にのぼる袋中作詞の垣ノ花和讃をさしているとも考えられる。因みに、これら和讃は明治にはいつてから、エイサーとよばれるようになったのである。

連 載

会いたい人  
関 容子

北  
村  
和  
夫  
さん  
①



撮影／タカオカ邦彦

文学座、杉村春子の全盛時代、その相手役の中でも、ひと際男っぽい、いい男の役を一手に引き受けていたのが北村和夫さんだろう。

『女の一生』（森本薫）のヒロイン布引けいと互いに思い合いながら結ばれなかった栄二、『鹿鳴館』（三島由紀夫）の影山伯爵夫人朝子が芸者時代に思いを寄せた清原、そして『欲望という名の電車』（テネシー・ウィリアムズ）のランチの神経をズタズタにこわしてしまふ義弟のスタンレイ……。

北村さんの力強く深々としたバリトンの声に、杉村春子の時に甲高く時に艶めいて、まとわりつくような絶妙のデュエット。観客は息を呑みながら、演劇の快楽に浸る幸せをつぐく噛みしめたものだった。

『女の一生』第二幕。孤児（みなしこ）から堤家の女中に入った利発なけいと、その家の次男で快活な栄二とが、赤いタスキの引つ張りっこでじゃれ合うような一種のラブシーン。劇場中に青春の輝きが満ち満ちたあの客席に居合わせた

ことは、私の一生の宝物だ。

北村和夫さんは早稲田大学在学中、昭和二十四年に『女の一生』の舞台を観たという。

文学座一番の財産とも言えるこの作品の初演は、昭和二十年四月、渋谷の東横映画劇場だった。敗戦間近のことで、空襲警報がしばしば発令され、最後まで上演できた日はほとんどなかったそう。

「ほくは早稲田の前は日大三島で、仲間と演劇部を作って、ゴリキイの『検察官』の演出主演をこなしたりしました。その舞台を小学校のときの同級生今村昌平（のちの映画監督）が三島まで観に来て、滅多に役者を褒めない彼が、そのときは褒めてくれたんですよ。カッチャン、早稲田へ来て一緒に芝居やろうよ、って誘われてその気になって、試験を受けたら何と合格。それでほくは晴れて早稲田芸術科演劇専攻の四年に編入されたんです。親父は大叔母に病院の経営をまかされて、

将来ほくを医者にするつもりで、医院拡張計画まで立ててましたからね、ぼくが役者をめざすと聞いたときは、ひどい怒りようで、出て行け、勘当だ、つてことになりました。昭和二十四年の春のことです」

今村昌平さんが三島で『検察官』を観たときの感想は「彼の市長は押し出しも声も立派で、ずるさと間抜けさ加減が割合良く出ていた」というもの。さすがにのちの北村さんの芸質をよく見極めている。

「早稲田に入ってからには、食うや食わずの貧乏学生。そのころ今村と大西信行（のちの劇作家）と一緒に三越劇場で観たのが、かの『女の一生』だったんです。杉村さんはもう四十代のはずなのに、その舞台姿の若々しさといい、色っぽい声の魅力といい、際立った存在でしたね。それにコロツと参ってしまつて、文学座の研究生を志望したんです」

第二期研究生の同期には、仲谷昇、小池朝雄、松浦竹夫、本山可久子などがいた。

「三越劇場で『女の一生』を観たたった二年後、まだ研究生のヒヨツ子のぼくが、事もあろうに、杉村春子の相手役を仰せつかったんですよ。それまで何百回も堤栄二の役は中村伸郎さんだったんですが、旅公演のときに都合で休むことになって、ぼくが大抜擢されたんです。今村に言わせると、声がでかいからだろう、つてことですが、案外当てるかも知れません（笑）。客席に声が通るというのが、まず役者としての第一条件でしたからね」

その『女の一生』の旅公演は、昭和二十六年十二月の高知公会堂と土佐山田映画館だった。杉村春子、四十五歳、北村和夫二十四歳。「稽古する時間が取れなくて、いきなり高知で舞台に出されました。第一幕の、誰もいない堤家に、ねずみのシツポみたいな髪をした汚ない身なりの女の子が迷い込んでくるでしょ。十六歳の役ですよ。ぼくはそれを舞台の袖で見てるんだけど、それがちつともウソに見えなくて、あんまり可愛くて、涙が出てき

ちやうのね。そこにあつた櫛を髪にさしてみ  
てるところにぼくが出てくと、あ、びっくり  
した！ って言うところもじつに可愛いん  
だ。いろいろあつて、その櫛、君にあげるよ、  
って言うと、ワァーッ、と泣く。どうしてこ  
んな芯から振り絞るような泣き方ができるん



十七歳の頃



「鹿鳴館」

だろう、というくらい、それが可愛いよね。でも一幕終るとぼくがすぐ怒られるんだ。本気で腕つかんで痛いじゃないの、って（笑）。それで第二幕。例のタスキを使う場面ね。ぼくが力一杯引っぱったらブツンと切れちゃった。それまで一回も切れたことなんかなかったんですって。それで幕になったら、お芝居、あんなに強くやるもんじゃないわよ、って（笑）。各幕ごとに怒られる。それが次の幕へ行くためのバネみたいな気がしたな。怒られないと次へ進めないみたいな気になって。しかしあんまり怒られ続けると、追っかけてって、いないところで彼女の髪をぶんぐる真似したり……そんなことをしたもんですよ。楽しかったなあ」

杉村春子が「可愛かった」という言葉が何回も出てくる。

「年齢じゃないんだね。彼女にはよく、ただ年取ればいいってもんじゃないのよ、あなた、誰だって年取るんだからね……なんて言われ

たな。その口調がたまらなく可愛い。杉村さんがなんで古くならないかと言えば、感性なんです。芝居つてのはセンスだと思う。役者の第一条件は、すごい柔軟性がある、ってこと。その柔軟性の元になるものとは言えば、素直であることだと思いますね。杉村さんは素直でしたよ。自分の息子が孫みたいな年齢の三谷昇君から、こう言われたんだけど、ねえどう思う？ って訊かれて、そうしたほうがいいですよ、って答えると、じゃやってみるわ、って、まるで少女のようでしたよ。芝居が好きなんだよね、素直って、一つの才能なんじゃないかなあ」

杉村春子を追慕する北村さん自身が、まるで少年のようだ。

「杉村さんは面食いですからね。最初の御主人も次の御主人もお医者さんで、二人とも杉村さんより先に亡くなったけど、なかなかのハンサムでしたよ。だからぼくをつかまえて、あなたや加藤武や江守徹は二枚目じゃないの

よ、って言うから、どうしてですか？ っ  
て訊いたら、だって首が太くて短いでしょ？  
そういうのはダメなのよ、オヤそうですか、  
って（笑）。ぼくには何でも平気で話せたの  
ね。好きだったのは二枚目で、文学座では大  
出俊とか亡くなった高橋悦吏とか。やっぱり  
彼らは普段もスツキリして、いい男でしたか  
らね、口惜しいけど」

何（なん）とも率直に語る北村さんは、やはり東  
京小石川（文京区竹早町）生まれの人だった。  
「今の竹早小学校で、今村昌平とは四年生以  
来の悪友」だそうだ。

北村さんの祖父は警視庁に勤め、祖母は助  
産婦をしていた。曲り角には「産婆北村ハナ  
スグソコ」という看板が出ていて、北村さん  
を訪ねてくる学校の友だちは、みんなこの看  
板を目印にした。

「祖父（じい）さんというのが変り者（へんりや）でしてね。警視  
庁（けいし）にいながらアナーキストの大杉栄と仲がよ

くて、大杉が刑事に追われて逃げこんできた  
りすると、もう刑事も手出しができなかった、  
ということですよ。右とか左とかの思想に関係  
なく、祖父は男らしい男に惚れこんでいたん  
だろうと思いますね」

そう言えば北村さんの当り役『鹿鳴館』の  
革命家清原永之輔も男らしい男だ。

「この祖父さんが浅草が大好きでね。休みの  
日にはエノケンの『笑いの王国』とか、軽演  
劇（けいげん）なんかにもぼくをよく連れてつてくれまし  
た。ぼくは文学座に入る前、本氣でお笑いの  
ほうへ進みたい、と考えていた時期があるん  
ですよ、本当に。まったく祖父の影響なん  
ですね。ぼくは祖父さんとは骨格から、歯や胃  
袋の頑丈さから、声のでかさから、目立ちた  
がり屋の性格まで（笑）そっくりで、これ隔  
世（かくせ）遺伝なんですよ。まあ一概に目立ちたがり  
と言っても、どこかにシャイで繊細な部分も  
持っていないと、役者には向きませんけどね」  
北村さんのサツパリと明るい芸風は、この



「欲望という名の電車」  
杉村春子と共演する北村和夫

豪放磊落な祖父によるものだったのか。

「父は祖父とは反対で、野暮ったいことは大嫌い。好きなのはギャンブルと女（笑）、というシテイボーイですよ。三島の大叔父が亡くなったあと病院をまかされてから、単身赴任してました。週末には帰ってきて、ぼくたち一家、お袋と二人の兄と姉と五人で新橋駅へ出迎えに行く。するとそのまま焼き屋とか中華料理屋に連れてつてもらえるのが無上の楽しみでね、親父に会うのは二の次だった（笑）」

一家は東京空襲で焼け出され、それから父親のいる三島に移り住むことになる。

「お袋という人は、昔の女には珍しく、九州からたった一人で上京してきて助産婦になった。そのときに当時産婆協会会長だった祖母に見こまれて、親父の嫁になったんですな。気だてのいい働き者の母でしたけど、ぼくが役者になりたてのころ、癌になって東京の病院へ入院しました。親父は毎週日曜になると

三島から東京へ馬券を買いに出てくるのに、病院のそばまで行きながらとうとう最後まで一回も寄るといふことをしませんでしたね。お袋も普段は、こんなやつれた顔を父さんに見られたくない、と言っているながら、日曜になると何だかソワソワしてました。心待ちにしていたんでしょう。可哀そうだったなあ」

三島で葬儀が行われたが、その日北村さんは舞台があつて、翌日帰ってみると、父親が電灯もつけずに一人で祭壇の前に座っていた。

「お母さん、いなくなっちゃったよお……、つて、親父が声を上げて泣きましたよ。末期癌でどうにもしてやれないのがわかってたんで、どうしても見舞えなかつたんでしよう。そういう気弱な、優しいところのある親父でした」

その父親も、母親のあとを追うように間もなく亡くなった、ということだ。

（つづく）

『浄土』にも寄稿していた  
風船画伯・谷中安規の全貌展

谷中安規の夢展  
はじまる

平成15年 平成16年  
12月9日～2月1日  
東京 渋谷区立松濤美術館

開館時間 午前9時から午後5時  
入館料 一般300円 小中学生100円  
住所 東京都渋谷区松濤2-14-14  
最寄り駅 JR渋谷駅下車徒歩15分  
京王井の頭線神泉駅下車徒歩5分

平成16年  
4月27日～5月23日  
長野 須坂版画美術館

開館時間 午前9時から午後5時  
入館料 一般300円 小中学生100円  
住所 長野県須坂市大字野辺1386-8  
最寄り駅 長野電鉄須坂駅よりバス

平成16年  
6月6日～7月4日  
宇都宮美術館

開館時間 午前9時から午後5時  
入館料 未定  
住所 宇都宮市長岡町1077  
最寄り駅 JR宇都宮駅よりバス

『浄土』の  
バックナンバーから  
未公開作品が見つかり  
『浄土』も出展

風船画伯と呼ばれ、内田百閒、佐藤春夫ら文学者にその非凡さを愛され、棟方志功のライバルでもあった谷中安規の作品展が12月9日から渋谷の松濤美術館で始まる。

木版画で多くの挿絵や装丁を手掛けた谷中安規のファンはいまも少なくない。そうしたファンの目が届かなかった作品がなんと本誌『浄土』のバックナンバーに掲載されていた。昭和十二年六月号のよみもの特集で、三点の挿絵とともに、帝釈天が出てくる「大福長者」と題した童話、続いて同年十二月号で挿絵二点が掲載されている、お地蔵様が出てくる「雪夜の尼」と題した童話だ。ともに原稿も谷中自身が書いている。

この作品は、ある谷中ファンが古本屋で偶然『浄土』から見つけたものです。今回の展覧会ではバックナンバー二冊が展示される予定もあり、関係者の間では話題を呼んでいる。興味のある方はぜひ美術館に足をお運び下さい。

なお、松濤美術館の瀬尾典昭主任学芸員は今回の作品をこう評価している。

「谷中安規は奈良県桜井の長谷寺の門前で生まれ、小さい時を過ごし、さらに護国寺の豊山中学（真言宗系）に学んだ。そうした仏教的環境は彼の作品の大きなバックボーンで、今回のこの童話はそれを直裁に反映し仏教説話を題材に創作された物語である。同時に私小説的な文章が多いなか、純粋に創作ドラマであり、かつ自分自身で挿絵をつけており、安規の文学と美術の才能の両方が発揮された文画一致の作品として興味深い」



連載  
『梵字』  
5

塔婆の梵字の

# 意味するもの (1)

人間とバックの仏

真野龍海

塔婆表(二)刷毛書き

ଅ  
ଦ  
ଃ  
ସ  
ମ୍

塔婆表(一)毛筆書き

カ  
キ  
ク  
ケ  
コ

今回は、もっとも知られている梵字を

説明します。おそらく皆さんは塔婆というとお墓を連想され、なんとなく、亡き人への連想があると思います。

「仏塔の形、宝珠・半月・三角・円形・  
方形は人の形」

元はお釈迦様等の供養、追善に作られた仏塔に由来します。

塔婆は、図のように五段になつていて、形は、上から一番目は宝珠型で人間の頭を、二番目は三角で首を、三番目は逆三角形形状で胸を、四番目は円で胴を、五番目は方形で腰を、それぞれ示していて、全体で人が座つている形になります。つまり形で人を表しています。

〔上から五つの梵字は空・風・火・水・地の人の五大要素〕

同時に、表のそれぞれの部分には、梵字が一つずつ書かれ、上から順次について、キャ・カ・ラ・ヴァ・アの五の梵字が書かれます。なお、この力タカナの言い方は梵字本来のそれと違って、日本

仏教独特の読み方で、これで通用しています。この五つの梵字は、この順に、空・風・火・水・地の五大要素を表しています。つまり、要素として人を構成しています。

空はスペースです、人があるためにはスペース、空間が要ります。スペース無しであるのは幽霊だけです。風は呼吸で、息です。人が死ぬと息が途絶え、息引き取ったと言ひ、風も生命の要素です。人が死ぬと、冷たくなったなど言ひます。

火は熱、同じく生命の要素です。水は人の六乃至七十パーセントです。水は生命の元です。人は皆大地の恵に生き、死して大地に還ります。このように空・風・火・水・地の五大要素は人間の生命を維持しています。これを表した塔婆は人間の生命を表しています。

### 【塔婆の裏のヴァン字】

さらに、この塔婆の裏面に、バンという大日如来を意味する梵字を長々と書き表す。それは、表面五梵字は一人間を表

しますが、裏返してみると大日如来という仏様であることを、物語っているようです。そうです。なんの誰々というように人は個人々々の命ですが、実は背後バックには大きな仏様によって生かされていることが示されています。単なる木の塔婆でなく、人は五つの要素の仮の集合体であっても、背後は、大きな仏様の力に負っているとも受けとめられていいと思います。

上から説明していきます。第一番目は仏教ではキャといひます。本当は、本後のㇿㇿです。クハという方が正しいのですが、日本仏教の昔からの梵語の仏教、梵字の世界ではキャと読みます。

### 【キャの書き方】

先ず、キャの書き方です。①初めにア点の筆を下ろし、②③と筆を曲げ降ろし、④の点を打って筆を上げ気味に右に引き、⑤で力を入れ、やや筆を上げ気味にして⑥右下に、次に⑦から垂直に降ろす、はねることなく、斜め右下に筆を持

ち上げながら終る。

なお、ア点というのは、梵字では最初にこのように一点を置き、それから書き始める事としています。それを書いて、次の筆の下に隠れて見えなくなる時もある、その点で梵字らしい形になることでもあります。しかし、梵字執筆の宗教的な作法です。思想的にもア字本不生（あじほんふしょう）といひ、ア字を全ての文字根元、全ての宇宙の本体と見る密教の哲学があります。

### 【種子】

普通、塔婆、お札、朱印帖などで、よく目にする梵字は、梵語の言葉というより、種子（しゅし）と言ひ、仏、菩薩、要素等を表すシンボル、マークのような文字の梵字で、梵語の字引を引いても出てこない日本仏教で育った独自の象徴文字です。しかし、少数の梵字は、名詞そのものだったり、その名詞の頭文字だったりします。このキャ（ㇿㇿ）は、この一文字だけで、虚空という意味の名詞です。それで、「空」と訳されています。

連載

# 「バリアフリー考」

第4回

文／白木カ  
バリアフリーデザイン研究会事務局長  
一級建築士／インテリアプランナー

写真／丸山カ  
バリアフリーデザイン研究会会員  
歩行者・電車空間デザイナー

## 玄関

玄妙なる関門。玄関の語源はここにある。  
禅宗の言葉を起源とすると聞いた覚えがある。  
何とも硬つくろしい表現だ。語源まで硬  
つくろしい。

実は、江戸の時代にさかのぼると、この玄



いかめしいはずの玄関もファミリーコンサート場になる

関にも表玄関、裏玄関があった。英語では、エントランスと表現されることがあるが、日本の玄関とは根本的には異なる。

「玄関」には単なる入り口というよりは、外界から一新して帰還してくる場所という意味が盛り込まれている。生きていくときの境界線という意味からすれば、かなり大切な場所である。この出入りの感覚をいい加減にすると、自分の命を落すことにもなりかねない。

何とも格式的だ。この感覚は上下足の習慣にもつながっている。何故、わざわざ土足から素足に変えるようになったのか諸説あるようだが、ともかく素足は無防備な状態であるから安全地帯を意味している。神聖な場所が住まい。だから玄関は一段高くなっていて、簡単には上がれない。そのような住まいを持てるというのは地位の象徴でもある。それなりの地位につくと家がほしくなり、玄関は自分自身の鏡になる。まさに玄関こそ尊いところなのだ。一方、車いすで問題になるのも玄

関だ。地位の象徴だから、多くの場合段差を無くすことなど言語道断。それまでの自分を否定することになるから、多くの場合、激しい抵抗にあう。車いすを使う身になることは、社会の負け犬になること。醜くなった自身を衆目にさらすことは人生の終わりに等しい。何もせず、入りにくい家に住めば住むほどに、本人は孤独になっていく。誰も寄り付かず、どこにもいけなくなる。本当に終わりだ。

そんな戦時中の神風特攻隊みたいなことを平気で考えるお年寄りがいるから驚く。個人的には、そんな孤独な人生をおくることは願い下げだ。格式を捨て、境目の無い、対等な関係が求められている。多くの人との出会いの場が玄関。残りの人生を楽しむするか、孤独にしていくのか、象徴的な入り口としての「玄関」。

あなた自身が決めるものだ。すべては、あなた次第だ。

## 骨格矯正で病を治す 「オステオパシー」

CAMUNET / 代替医療利用者ネットワーク

井上朝雄

マッサージや整体、指圧などのように手でもって患者の身体に施術する、いわゆる手技療法も代替医療に大きな位置を占めていますが、その中で、前回ご紹介したホメオパシーと並ぶ代替医療の代表のひとつと言われるのが「オステオパシー」です。

オステオパシーとは、ギリシャ語で「骨」を意味するオステオスと、「病氣／治療」を意味するパソスという二つのことばから作られた造語で、手技を通じて頭蓋骨を含む全身の微小関節を調整し、筋骨格系のバランスを正すことによって、からだが持つ自然治癒力や免疫力を高め、健康に導くという骨調整療法です。

創始者はアメリカの医師アンドルー・ステイル博士で、南北戦争で北軍の医師だったステイルは、十九世紀

の薬剤信仰を批判し、薬物を使わずに病気を治したいと考えて、少年時代から強い関心を寄せていた「骨格の調整」を研究、創意工夫を重ねてこの療法を考案しました。つまり、オステオパシーは近代医学に対する批判から生まれたものなのです。

博士の考えはこうでした。

「人間の身体には自然な回復力が備わっているが、血液循環や神経支配機能が妨げられると、それがうまく働かなくなつて不調となる。そのような循環を妨げる主な原因は、身体各部をつなぐ関節の動きの低下といった構造上の問題にある」（日本オステオパシー学会ホームページより）

実際、オステオパシーは頭痛や腰痛だけでなく骨格の

矯正だけで肺炎、丹毒、腸チフス、疫病などの感染症などまで多くの病気を治せるようになり、大いに評判を取って、十九世紀末には最初のオステオパシー・スクールが開校、オステオパシー医の養成が始まります。

その後、近代医学側から排撃される時代もありましたが、その高い治療効果は否定しようもなく、第二次大戦後は徐々に公認されるようになり、現在ではアメリカ五十州すべてがオステオパシーを公認、六年制のオステオパシー大学の数も全米で十五校にまで増えています。またその卒業生には近代医学の医師の称号であるM・Dと社会的地位が同等であるD・O（オステオパシー医）の称号が与えられます。

ところで、このオステオパシーが日本に紹介されたのは、何と明治の終わりのころ、一九一〇年前後だと言われています。大正九年に発行された「山田式整体術講義録」という本によると、大正の初めにはすでにオステオパシーは無薬療法として施され、効果をあげていたそうです。また、同書では「オステオパシー」ということばがはつきり使われており、「書籍をアメリカから直接取り寄せて研究した」などとも書かれているそうです。しかし、ほかの療術と合わせて編み出した方法を「整体術」として紹介し、講義し、またオステオパシーを学んだ人たち

も同様に自分なりの方法を加えたりして伝えたために、いつしかオステオパシーの原型は変化、オステオパシーということば自身も伝わらなかつたようで、あらためて紹介されたのはこれも戦後のことです。

……というのがオステオパシーのあらましですが、ひとつ面白い話があります。われわれカムネットの副代表であり翻訳家の上野圭一さんが、オステオパシーの名医ロバート・フルフォード博士の著書「いのちの輝き——フルフォード博士が語る自然治癒力」を翻訳することになり、アメリカに博士を訪ねたときのこと、博士は「オステオパシーの源流はどうも日本にあるらしい」と言いだし、マンリー・ホールという人の『人間』という本を見せてくれた。その扉には、「オステオパシーの源流ともいふべきものは柔術の整復法であり……」と書かれていたということです。

これはどういうことなのか。ひよつとしたら明治時代に日本に紹介され、他の療術と組み合わさって変化した「日本のホメオパシー」のうち、あるものは柔術の整復法と合わさって、逆にアメリカに紹介されたのかも……こんど上野さんと会ったら、あらためて聞いてみようと思っています。

ただかまえておなじ仏のくににまいりあいて、蓮のうえにてこの世のいぶせさをも晴るけ、ともに過去の因縁をもかたり、たがいに未来の化道をもたすけんことこそ、返す々々も詮にて候べき。

（『正如房へつかはす御文』）

私もあなたも阿弥陀さまの同じお浄土へ往生してそこで出会うのだということをよくよく心得て、蓮の台でこの娑婆世界での憂いを晴らし、それまでの思い出について語り合い、また娑婆世界に還って共に助け合い、人々を教え導くことこそが一番大切なのです。

まずは思い出話に花を咲かせて

「そういえば、あの通りの提灯屋の〇〇さんはお変わりなく？」

「えーと、先月でしたか、〇〇さんの百ヶ日法要を終えたばかりです」

「えっ、そうなんですか！ 昨年お目にかかった時は、あんなにお元気そうだったのに……。乾物屋の△△さんは、足腰が丈夫ですよね？」

「△△さんは昨年の今頃お亡くなりになりました……」

「あっ、そうですか。……同級生に次々と先立たれるのは、なんともいえず寂しいものですね。長生きも良し悪しです。思い出話をする相手さえいなくなってしまうのですから……」

先日、お彼岸のご回向でSさんのお宅にうかがった時の会話です。

Sさんは、八十五歳の誕生日を間近に控えたご高齢でありながら、老人会を主催されたり、若い方にお人形作りを指導されたり、「老い」をまったく感じさせないバイタリティーあふれるお方です。それこそ、百歳を越えてもその勢いが衰えそうもないお元氣さです。

そんなSさんとこうした会話を交わすこととなったのも、Sさんが幼少の頃から住み慣れた、お寺近くの故郷を離れ、二十年ほど前に遠方に引っ越されて

いたからです。

やはり遠方に引っ越されたNさんという方がいらつしやいました。Nさんも、お彼岸やお盆などお寺参りのたびに旧知のお宅を訪ねるのを何よりも楽しみにされていました。そして、訪ねるお宅が年を追う毎に少なくなっていくことを、ことのほか寂しがっておられました。

元気で長生き。それこそ誰もが望む姿であることに異論はないでしょう。けれども、たとえわが身が元気で長生きしようとも、この自分を取り巻く、心と心のふれあいを共にしてきた「かけがえのない大切なあの方」たちまでもが、自分と共にそうあり続ける保証などどこにもありません。

かつて、百歳を越える双子の姉妹ということで、一躍、時の人となった金さん・銀さん。その金さんが亡くなられた際、銀さんが号泣されていました。年に不足はないのでしょうか、百年以上も苦楽を共にしてきた数知れない金さんとの思い出が、それこそ走馬燈のように銀さんの脳裏を駆けめぐったからでしょう。無論、時間の長短が問題ではありません。心と心がふれあってきた一瞬々々の濃密さこそ何より大切なのです。

お釈迦さまがお示しいただいたように、この世は無常であつてありとあらゆるものが時々刻々と移り変わつていきます。いづどこで「大切なあの方」と「この私」との別離の悲しみが訪れるかは、まったく分かりません。そんな儚い私たちだからこそ法然上人は、お念仏を称えてお浄土に往生しなさいとお示しいただきました。冒頭のご法語に示されているように、阿弥陀さまのお浄土こそは、「大切なあの方」と「この私」との心と心の再会が叶う「俱会一処」の場であるからです。そして、だからこそ何の憂いも患いもなく悟りへの道を速やかに歩むことができるのです。

私は、冒頭のSさんとの会話に次のように続けました。

「そんな気の弱いことをおっしゃらないでください。Sさんらしくありません。お念仏を回向すれば、阿弥陀さまは先に旅立たれたお友達も必ずお浄土へとお導きくださいます。ですから、私たちもお念仏を手放さず、大切なあの方の待つお浄土に必ず往生させていただきます。そして、そのお浄土で、まずは思い出話に花を咲かせることからはじめさせていただきますよ」と。合掌

法然上人の  
和歌  
と私

(フリージャーナリスト)

佐々木美冬

よく見れば、雨の葬列には見知った顔が並んでゐるのだった。今日ばかりは神妙な顔つき、悪友たちの何人かと目が合う。いつもならすれ違いざまにでさえ、辛辣極まりない冗談を交わすような連中。彼らとの眼差だけの会釈が、なんともいえすこそばゆく可笑しい。可笑しいのだが笑えない。笑おうとしても顔が歪むだけで皮膚がひりひりと痛むのだった。

黒傘黒服の列は延々と、そして黙々と続く。死者のことを想う。彼もまた私たちの仲間であつた。

「自殺じゃない、と奥さんはいつてゐる。事故です。単なる事故なんです、と」

真後ろの友人が呟いた。

家業を継いで仕事も順調だったはずだ。家庭に不和があるとも聞いたことはない。二人の子供はともに名の知れた高校に通つていて、自慢こそすれ問題を起すような性格でもない。家は建て直したばかりで「ちよつと無理し

たが三階建てにしたんだ。流行の二世帯住宅つてやつさ。最初は反対していたおふくろがいま一番喜んでゐる」とは御当人の弁だ。その新築の三階の屋根に登つたという。なんということのない、いつもの夕餉のあとだったという。

そして落ちた。

脳天から落ちた。

焼香を終えた順に、私たちの仲間は三々五々歩き出した。駅に向かわず公園を抜けた。通夜の席は用意されていたが、私たちは長く留まることをしなかつた。僅かの時間、酒を呑み煮物をつついたのは二人、突然の未亡人となつた彼の妻にそれぞれお悔やみの言葉らしきものをばそぼそと口ごもるように伝えて、私たちは早々に退散したのだった。

雨は上がつてゐた。ふと、こみ上げるような水の匂いのなかに私たちはいた。生者に特有な濃い体液を思わせる泥の匂い。枯蓮、破

蓮というのだろうか薄茶色の茎だけとなった  
夥しい数のそれが池面から突き出していた。

いけのみつ

人のころににたりけり

にこりすむことさためなければ

心に思つたのだろうか。あるいは声に出したの  
のだろうか。それすらも判然としない。

私は夜のボート場を見ていたのだつた。誰も  
いない無音のボート場。ただひたすら静か  
だつた。風もない。それなのに、乗り場にす  
べて繋ぎとめられたボートの一艘一艘がそれ  
ぞれ微かに揺れていた。

やはり、きつと意識もなく呟いていたのだ  
ろう。喪服姿の何人かが反応した。

「それは、なんだい」

私は答えなかつた。答えられなかつた。目  
頭が熱くなつたからである。その夜はじめて  
涙が出たからである。実際、答える必要はな

かつたのだつた。問いを発した友人の目もす  
でに真つ赤になつていたのだから。

私は法然上人の和歌が好きだ。

難しい解釈はわからないが、澄み切つた達  
意をまず感じることができる。上人の和歌が  
伝えるのは、確かにまさしく透徹した真理で  
ある。そのことはわかる。しかし、それ以上  
に、（つまり澄み切つた達意、透徹した真理  
であるのはもちろんだが、それ以上に）ある  
温かさのようなものを感じるのである。凡な  
る私たちを抱き取ってくれる遙かな大きさを  
感じるのである。

むまれては

まつおもひ出んふるさとに

ちきりし友のふかきまことを

手許に一冊の本がある。

『浄土への道 法然上人法語抄』

文庫本ぐらいの大きさ。持ち歩くのにちやうどよい。ポケットにも入るが、私は常時、取材用の鞆に入れていた。ふっと空いた時間があるとそれを読む。巻末に上人の和歌が十二首載っていて、特にその頁を好んで読む。註を頼りに少しづつ読む。わかる歌もあるがおおかたはよくわからない。そんなときは、意味を考えずにまるごと読むようにする。いわば全身で、ひたすら浴びるように読む。音読する。

すると、以心伝心とでもいうのだろうか、なんとなく理解できるようになった気がするから不思議だ。

たとえば「むまれては」の一首はこうだろう。生れる。往って生れる。

浄土に生れる。

さきに生れても、あとに生れても、まず思うのは、この世にあっては同行の人たちのこと。さきに生れれば蓮の臺に半座を空けてお待ちましよう、というのである。

偉そうにいつているが、ほんとうのところはよくわかっていない。

わかっていないが、この歌に接すると、ひとりの先輩のことを思い出す。

まことに敬愛すべき人物だった。学生の私に御親切にも酒の呑み方を教えてくれた。文学論を語らせれば、まるで鋭利な刃物のように的を決りとった。山を愛し、ラグビーを愛した男であった。六〇年安保闘争において逮捕歴があるのに、平成天皇の皇太子時代に、皇太子御夫妻に御進講をしたことがある。ことの善悪とか、人生の処方のようなことはともかくとして、こんな男は後にも先にもないだろうと思う。あえていえば、一種、快男児。その先輩が酒で死んだ。入退院を繰り返して、医師に何度も最後通告を告げられたのに、彼は酒を呑み続けた。七月十四日、巴里祭すなわち東京の盂蘭盆会の真つ只中の日、彼の心臓は停止した。

弔辞に立った友人の大学教授はまずその冒

頭において名を呼び捨て、そして「馬鹿野郎！」と絶叫した。

つゆの身は

ここかしこにてきえぬとも

こころはおなしはなのうてなそ

私も泣いた。このときばかりは号泣した。だが、しかし私はやがてゆるゆると立ち直り、法然上人の和歌のひとつを思い浮かべていた。しみじみと。沁みいるように。

この世の出会いも別れも、しばしの仮のものなのだ。少し遅れて浄土に生まれ、その土における再会をゆつくりとたのしみにしていればいいのだ、と。

私は懸命になつてそれを伝えようとしたのだ。ほぼ七歳も年上の彼の同年の友人たちは、若い私のいうことを真剣に聞いた。通夜の席で、法然上人の和歌は、彼らの心を確実に癒したのだった。

私たちはひとりひとり膨大な数の死者たちを持つてゐる。受け持つてゐるといつてもいい。それは、たとえば父母であり祖父父母であり曾祖父母であり、あるいは妻であり兄弟であり友人である。

喪えば悲しい。悲しければ泣けばいい。そのときは大泣きに泣け。しかし、忘れるな。順が来れば自分もまた浄土に生まれるのだ。彼らは少しだけ先に浄土に生まれ、待つていてくれるのだ。そのことを思い出せ。

阿弥陀仏と

いふよりほかはつのくにの  
なにはの事もあしかりぬべし

しばのくに

あけくれかかるしらくもを  
いつむらさきのいろと見なさん

やつぱり私は法然上人の和歌が好きだ。

## 笑

心象書道

永井健策

いつもの言葉を他の言葉で表現してみると、本当はいつもの言葉の意味をたいして知らなかったのだと感じます。

たとえば「笑う」とは他の言葉を借りれば、「〔うれしかったりおかしかったりするとき、気持ちがほぐれて〕目を細め口もとをゆるめた表情になったり、声を立てたりする」（三省堂）のだそうです。

「笑う」という文字が上の表現のように何部もの文字になっても、そんなに詳しくは解らない。

言わば何となく解って、それも個人の分野でしか解らないもの。

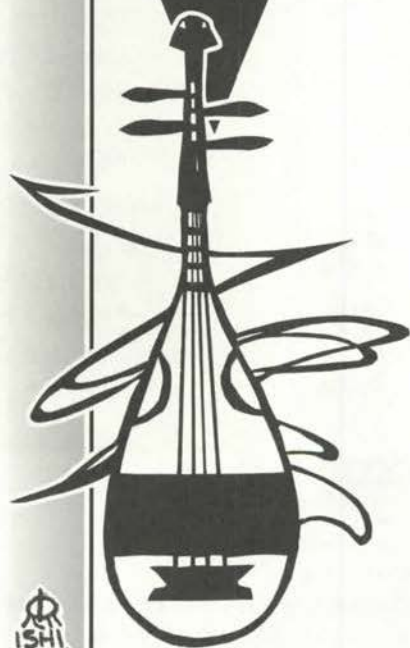
それを皆で使用しているのが、言葉の世界なんですね。

（ながいけんさく）

昭和20年群馬県生まれ。中央大学法学部卒業後、読売広告社に入社。企画セクションに配属され16年在籍した後、自動販売機製造メーカーのサンデンに転職。販売企画の仕事を16年続け、平成11年に独立。会社を設立し、新規事業に取り組んでいる。趣味で始めた「心象書道」が趣味の世界を超え、展覧会を開くまでになっている。

法然上人を  
めぐる人々

一の谷序章



◆第二回◆

石丸晶子

絵・石川忠夫

## (四)

幼少の頃から仁和寺の御室に伺候していた経盛の嫡子皇后宮亮但馬守経正は、都落ちの慌しさの中にも御室との別れがたいつなかりを思い出し、侍五、六騎を連れて、琵琶の名器青山を返しに仁和寺に馳せつけたのであった。

門前で馬上を降りた経正は、取り次ぎの僧にこう申し入れた。

「一門の運尽きて、今日早くも都を離れることになりました。この世に思い残すこととは、ただ、御室への御名残りばかりでございませう。幼い日より元服の日までは、一日たりとも欠けることなく御前に伺候してまいりましたが、西海に赴きましたのちは、いつ都に帰ってこられるかわかりませぬ。それを思い、せめて御室に別れの御挨拶を、蔭ながらも申

し上げたたく存じ、御門前に只今参上いたしました」

取り次ぎの僧からこの言葉をきいた御室守覚法親王は、深く心を動かした。

甲冑かっちゅうをよろい、弓矢を帶した姿ゆえ、お目にかかることは御遠慮申し上げます、という経正に、守覚法親王は、

「遠慮には及ばぬ。その姿のまま参れ」

と命じ、殿舎の前面に一段下げて床を張り出した広廂ひろびろ（廊下）に経正を招じ入れた。

その経正のところに、供の武士が青山を持ってきた。経正はそれを受けとり、守覚の前にさし置くと、涙とともにいった。

「先年、お預りいたしました青山を持って参りました。都落ちに同道して、これほどの名器を田舎の塵となしてしまうのは残念でございませう。もし万一、平家の運命が開けて再び都へ立ち帰ることがございましたら、そのと

き改めて御下賜くださいませ」

守覚は式子内親王の弟である。姉と同じく和歌をよくし、みやびを解し、人の心の悲しみと喜びを解する、学徳ともにすぐれた男性であった。

経正のことばに守覚は深く心を動かされたのである。彼はかたわらに控える侍従にすずりを持ってこさせると、和歌一首を書きしたためて経正にわたした。

あかずして わかるる君が 名残りをば  
のちの形見に つつみてぞおく

別れ難く去っていくそなたの名残りのこの琵琶を、のちのちまでの形見として、大事に包んでおくぞ。

守覚の目には涙が宿っていた。

断腸の思いとはこのときの経正の気持をいうのであろう。経正は稚児として先代覚性法親王のときから御室に仕え、当代守覚法親王

になってからもいたく愛されて御室に仕えてきたのであった。

守覚の和歌をきいた経正の胸に、それらの日々のことが一瞬のうちに思い出される。

一体いつの日から平家一門の運命が狂いはじめて、今日このような仕儀になったのであろう。いつまでもいつまでも、静閑な仁和寺のみどりの中で、御室の側近くにお仕えしていたかった。

せきあげてくる涙の中で、経正は守覚に返歌した。

呉竹の かけひの水は かはるとも

なほすみあかぬ 宮のうちかな

お庭先の竹の筧の水は流れ流れて、もう昔の水の姿ではなくなっていました。時が移ろってしまいました。それでも常に、仁和寺の御室の御所の水は澄んでおります。この静閑な、時の移りゆきを越えてたたずむ御庭

に、私もいつまでも住んでお仕えしようございました。

## （五）

御室の御前を退出した経正に、なお別れを惜しんで、何人かの稚児や寺僧たちが桂川のたもとまで見送ってきた。

その人々に経正は、

旅衣 よなよな袖を かた敷きて

思へばわれは 遠くゆきなむ

思えば、今後わたしは、夜毎に旅衣の袖をひとり片敷いて、どこまでも遠く行くことであらう。

と一首を詠じると、煩惱を断ちきるようにさつと馬に一鞭あて、供の武者たちとともに駒を速めて、都落ちする一門のあとを追っていった。

「さすがは修理殿御一家。いかにも名器青山

を西海まで伴っておいりましたならば、今日までのことを考えてみますに、どうなっていたかしれませぬ。経正殿は御立派じゃ」

門脇の平中納言教盛がいった。

「まことに、西海に赴いて以来のころをふり返れば、ことばありませんのう」と宗盛が応じた。

「ようようにして九州太宰府まで主上を奉じて辿りつき、鎮西（九州）の武者どもを集めてここに都をたて、内裏をも造営せんとひと息つきしときに、緒方の維義の謀反にあい申した。あのときの驚きだけは、今思うても動悸が高まります。口惜しうございます」

そういうと、教盛はそのときのことを思い出したのであらう、真実口惜しそうに齒がみした。

「そうであった。そうであった」

二度、三度経盛は深くうなずいて、



「われらも忘れはせぬ」

西海に赴いた平家が、太宰府にひとまずは落着いてほっとした九月十日。一門の人々は、折からの明月にさそわれて都を思い出し、月見の歌会を催したのであった。

忠度、経盛、経正その他歌を詠む一門の人々は、ありし日の栄華を偲んでそれぞれ歌を詠じ、経盛などは都に残してきた女の上を偲んでこんな歌を吟じていた。

恋しとよ こぞの今宵の 夜もすがら

ちぎりし人の 思ひでられて

ああ、恋しいことだ。都にいた去年の今夜、あの女と私は、二人の仲は永遠に変わらないと夜とおし契りあったものだ。そのことが今、思い出され、恋しくてならないけれども、女は今どうしていることだろう。

## (六)

油断といえど油断であった。都のみやびが忘れられず、明月を愛でて平家がそうして歌などを詠みかわしていたときである。突如、豊後の国（大分県）の豪族緒方の三郎維義が、三万余騎の兵をひきいて今にも攻め寄せてくる、という風聞が流れたのだ。

もとより武具などを体に帶せず、狩衣に指貫きという平常着でくつろぎ、歌を詠みかわし、さらには太宰府に流された菅原道真の故事などを語りあつては遙かな昔に思いを馳せていた一門の人々は慌てふためいた。

天皇の行幸には、二十二人でその御輿みこしをかつぐのがきまりであつたが、そんな御輿も何もあったればこそ、そのようなものは打ちすてられ、安徳天皇はわずかに二人の従者によつてかつがれる御輿に乗せられ、御母建礼門院以下高級女官たちもみな、はだしに徒歩で、袴の裾を高くたくしあげ、「われ先に」、「わ

れ先に」、と笠崎の浜へむかつて逃げていったのである。

建礼門院はじめ女性たちの御足は泥と血にまみれ、血は海辺の砂を赤く染めた。

笠崎でどうにか船に乗ることは乗り、ほとと息ついたものの、さて、どこに船を着ければよいかわからない。

新羅、百濟、高麗までも落ちゆきたい。一門だれもがそう思っても波風が逆らってそれもできず、結局人々は、夜を徹して柳ヶ浦（北九州市門司区。関門海峡西口）に渡っていった。

「柳ヶ浦では、われら一門の前途を思い詰められて左中将殿が入水された。あときの驚きと悲しみも忘れられぬ」

「左中将殿はわれら一門を見捨てて浄土に一人赴かれたのよ。あるとき、見捨てられたと思うたときの悲しみといったら、ことばもあ

りませんでしたぞ」

教盛と経盛がそれぞれいった。

柳ヶ浦に辿り着いて人々が、ひとまずは胸をなでおろしたときのことだ。小松殿（平重盛）一家の三男左中将清経は、何事にも思いつめる性格であったが、太宰府から追われたことがよほどこたえたのであろうか、一門のゆく末をはかなんで、入水してしまったのである。

柳ヶ浦のある夜、小船に乗った彼は船の屋形に立ち出で、心をすますようすでしばし横笛をふいていた。と、やがて朗々と澄み透った声で、和漢朗詠集の一節を朗詠しはじめた。

ひたひたと浜辺に寄せ、そして船べりに寄せる水の音が、静かに伝わる夜の闇の中に、清経の笛の音と朗詠の声が波紋のように伝わっていった。

（つづく）



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

# 浄土誌上句会

●息

〔特選〕

息つめて見入る子ふたり蟬の穴

増田 信子

庭か裏山か、小さい穴を見つけて連れを呼ぶ。二人で何の穴か考える。句中に「蟬の」とあるのは、知っている者の言うことで、子供の頭の中には、怪獣に類したものの姿まで交じっているのかも知れない。

〔佳作〕

亡き友の来る盆道をきよめけり

中島富士子

息つめて秘仏を拝す紅葉寺

河合富美枝

上り来て息荒々し男坂

佐藤 雅子

●看板

〔特選〕

看板に偽りあらず新走り

片桐てい女

新米を醸した出来たてである。うまいと評判の銘柄で、その看板の通り、香りも味も喉ごしも言うことはない。秋の夜長をゆつくり

過ぎてすのはこれに限るといふわけだ。飲み助にはたまらない句である。

〈佳作〉

城下町大看板に俤の字

中島 一子

無人駅看板隠す泡立草

浜口 佳春

金箔の剥げし看板秋の風

加藤 政男

●自由題

〈特選〉

二つ三つ食べて葡萄の甘き言ひ

寺下 忠至

葡萄狩りでも卓の上のものでも、読者は自由な場所を設定すればよい。あるいは平気でこういうことのできる人は、店頭での試食でもよからう。「二つ三つ食べて」は、誰にでも納得されそうである。

〈佳作〉

あかときの森ひんやりと秋の蝶

河合富美枝

蚊を追いて叩きそこねし手を笑う

中村 真一

法丈の袈裟に首振る扇風機

坂倉左武朗



## 参加作品.....編集部選

息

息切らし強歩療法秋高し

金谷友江

夏場所に金星を得た荒き息

細田初枝

息抜きとちよつと嗜む温め酒

大場清

寄せ植えの小さき花や息ひそめ

堀管子

「息止めて」レントゲン技師の声秋深し

山本美代子

運動会ひとり抜いては息切れて

中村洋子

秋通路もう一息と雨の中

山口信子

息長しプールに潜る男の子

谷しげ子

看板

看板を心に背負いはや六十路

今井恵子

看板に時代の流れ虫すだく

石原新

自由題

半巾の帯をきりりと盆踊り

蘭田郁子

半島の灯のとびとびに秋近し

池田伊吹

膝に磨く母が遺せし大瓢

北川弘子

野仏の座像のふもと虫の声

小林恵美

蚊を追いて叩きそこねし手を笑う

中村真一

白日傘坂の日差しを拾いゆく

島谷ときを

スパイクの土落とす背に稲光

佐藤まり

それぞれの影重ならず梅千さる

前島格也

浄土誌上句会のお知らせ

題

③季語ではありません

和

ベルト

自由題

締切・十一月二十日  
発表・『浄土』二〇〇三年十二月号  
選者・増田河郎子（『南風』主宰）  
応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内  
月刊『浄土』誌上句会係

# さっちゃんね

⑤ かい目

かまち♡ふう



## 編集後記

雑誌『浄土』

特別会員、維持会員の方々

巖谷勝正(目黒・祐天寺)  
大田秀三(大本山清浄華院)  
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)  
佐藤成順(品川・願行寺)  
佐藤良純(小石川・光円寺)  
須藤隆仙(両館・称名寺)  
袖山榮真(長野・十念寺)  
高口恭行(大阪・一心寺)  
塚田弘導(平塚・晴雲寺)  
中島真成(青山・梅窓院)  
中村眞道(仙台・愚鈍院)  
樋口隆信(石巻・西光寺)  
藤田得三(鴻巣・勝願寺)  
真野龍海(芝・天光院)  
宮林昭彦(大本山光明寺)  
宮林雄彦(横浜・大光院)  
山田和雄(諏訪・貞松院)

敬称略・五十音順

大いなるススキ貫く二河白道 岱潤

人権の研修会で北海道を訪ね、いくつかのアイヌ民族の資料館・博物館等を見学した。

二風谷の資料館ではアイヌ民族でいらつしやる副館長の萱野志郎氏からお話を伺うことができた。萱野氏はアイヌ民族が日本の先住民族であるという当たり前のことが、今でも認められていないことを語り、国連で認められていることが何故日本国内では認められないのかと笑みを浮かべながら優しくおっしゃっていた。しかし次に訪れた白老のポロトコタンアイヌ民族博物館の中村斎館長は、「私は開拓民の子孫で和人了。ずっとアイヌ民族にとつての良き隣人をさすシ

サムになろうとしてきましたが、私は今和人である以上、悪い隣人をさすシャモでしかないと思い、罪のつぐないの気持ちで館長をさせて頂いております」と苦しい表情で語った。

明治以降和人の行った行為は、その資料を読めば読むほど胸が痛くなる激烈なものであった。ウタリ協会の竹内渉氏は「突然に強力な武器を持ってやってきた人々が、今までの仕事も、言葉を禁止し、住んでいた土地までも取りあげ、そして働き手を連れて行ってしまったら貴方はどうしますか」と自分に置き換えて考えることを教えてくれた。そしてその上で「差別だけでアイヌ民族を語らないでください」ともおっしゃった。深い言葉として受け止めた。

(長)

ホームページ <http://www.jodo.ne.jp>

### 浄土

六十九巻十一月号 頒価六百円  
年費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十五年 十月二十日

発行 平成十五年 十一月一日

発行人 真野龍海

編集人 佐藤良純

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四・七 西明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三三)五七八 六九四七

FAX 〇三(三三)五七八 七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

### 編集顧問

大室了皓

### 編集チーフ 編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤光道

佐山哲郎

村田洋一



昭和36年10月号



昭和36年11月号



昭和36年12月号



昭和37年1月号



昭和37年2月号



昭和37年3月号



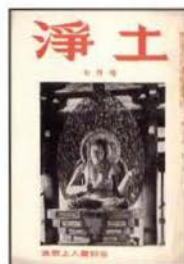
昭和37年4月号



昭和37年5月号



昭和37年6月号



昭和37年7月号



昭和37年8月号



昭和37年9月号



昭和37年10月号



昭和37年11月号



昭和37年12月号



昭和38年1月号

# 法然上人鑽仰会の

# 本



『念佛讀本』完全復刻版  
1,600円



『差出人は法然さん』  
600円

月刊『浄土』  
バックナンバー



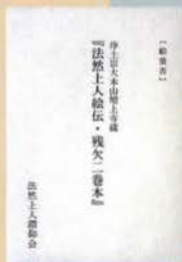
※額装寸法 47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)  
『選擇集絵解き物語』含む  
20,000円



『法然上人絵伝絵葉書』  
(8枚セット)800円



委託販売

増補版『浄土への道  
法然上人法語抄』  
1,000円



『ブッダ  
知れば知るほど』  
1,000円



※浄土宗大本山増上寺蔵  
『法然上人絵伝・残欠二巻本』より

当会発行の書籍、雑誌のお求めは、  
当会へお申し込みください。なお、月  
刊『浄土』を除き価格に送料は含まれ  
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会  
電話／03-3578-6947  
FAX／03-3578-7036